

巻頭言・・・「ロバか、ライオンか。」

第1次イラク復興支援群長
番匠幸一郎

旭川の第2師団司令部に「対応措置検討準備室」が設置され、部隊としてのイラク派遣の準備が本格化したのは、2003年10月のことだった。あらゆる分野で知見も情報も少ない中で、いかに短期間に有形無形の様々な準備を完整し、現地へ展開して任務を開始するか。いわば、コースもゴールも良く見えないが、やるしかない。とにかくスタートラインに着いて走り出そう。皆そういう意識だった。

第1次群は、2004年1月16日の先遣隊出国、2月1日の隊旗授与式以降、2月上旬から3月下旬にかけて逐次現地に展開し、サマーワでの人道復興支援活動を開始した。第1次群は5月26日をもって第2次群に指揮を轉移したが、その後、2006年7月、第10次群が全ての任務を完了し帰国するまでの約2年半にわたり、全方面隊からの約5500名の隊員がこの任務に従事し、全員が無事に任務を完了できたことは、陸上自衛隊の歴史に新たなページを刻んだと思う。



イラクに最初に掲げた国旗(2004年2月28日)

今般、研究本部によってイラク派遣の「行動史」が編さんされ、その全容を記録し、分析・評価して頂けることは、今時任務に携わった者として誠に欣快にたえない。そこで、その刊行にあたり、感謝と自戒を込めて若干の管見を申し上げたい。

その第1は、「イラク人道復興支援活動は、純然たる軍事作戦であった。」ということである。隊旗授与式において、小泉総理は「自衛隊の諸君にしかできない任務」と訓示された。派遣準備から、イラクへの展開、指揮・幕僚活動、人事、情報、兵站、復興支援活動、広報・対外連絡調整、撤収まで、振り返ってみれば、イラク派遣は、派遣部隊と本国の陸幕・関係機関・部隊等、国家と陸上自衛隊の総力をあげて行われた、本当の軍事作戦であり、我々が平素から訓練を重ね本業としている軍事組織としての真価を問われた任務だったと思う。

私はサマーワで、隊員たちによく「ロバとライオン」の例え話をした。我々の任務は、戦闘を主体とするものではないし、人道復興支援は一見非軍事の、軍事組織でなくても実施できる「ロバ」の仕事のように思えるかもしれない。では、なぜ「ライオン」である陸上自衛隊がこの仕事をするのか。それは、イラクでは「ライオン」の構えと能力があるからこそ「ロバ」の仕事ができるのであって、その逆はないからだ。我々が、当初から派遣計画を「全般作戦計画」とし、日々の会合も「作戦会議」としたのは、そのためである。

今時任務は、軍事組織による軍事作戦そのものであることを再認識させられる機会であった。

第2は、「平素からの当たり前のことの大切さ」である。

私は、イラクにおいて特別なことをしているという意識はほとんどなかった。むしろ、全てが、入隊以来、陸上自衛官として教えられて来たことの延長線上にあると感じていた。団結・規律・士気の大切さ、妥協のない厳しく確実な訓練の反復、指揮の要訣と幕僚活動の徹底、基本的行動・基礎動作の確行、また、親身の服務指導、家族や部外関連の理解・協力の重要性等、イラクの現場の全ては、国内で日々当たり前のように言われて来た、隊務や訓練を通じて築かれた部隊の実力そのものが試される世界であったと思う。ただし、そこは「筈（はず）」とか、訓練だからという「甘え」が許されない、本物でなければ通用しない、非常に厳しく現実的な世界でもあった。旧軍時代から警察予備隊の創隊を経て、現在の陸上自衛隊を築いて来られた先輩方が、黙々とそして着実に我々に伝えてくださった「当たり前のこと」こそが、最も大切であるということを実感した。

第3は、今時任務を「成功体験にしてはならない。」ということである。

今回のイラク派遣を通じ、全ての関係者がそれぞれの立場で考え、悩み、試行錯誤し、決断し、工夫し、実行して来たことは、その過程も結果も全てが陸上自衛隊の努力の結晶であり「宝の山」だと思う。しかし、イラク派遣はあくまでイラク派遣であり、今回通用したから、その成果や教訓が今後の国際任務に常に適用できるとは断言できないだろう。むしろ将来、今回のイラク派遣を振り返った時、我々がいかに幸運に恵まれ、その任務が非常にプリミティブなものであったかを感じるかも知れない。我々は、情勢や戦闘様相の変化、そして、その時点での国家の要請に柔軟に対応し、いつどこでいかなる任務を与えられようとも、これを確実に完遂していかなければならない。だからこそ、今回のイラク派遣での結果をステレオタイプの成功体験としてしまったり、金科玉条の教訓として拘泥してはならないと思う。イラク派遣から何を学び、実は何を反省しなければならないか、我々は新たな任務の都度そのことを考えなければならないと思う。

私は今回のイラク派遣が、陸上自衛隊の創隊以来培われてきた訓練や隊務の積み重ねの成果であるとともに、これまでの累次の国際貢献を通じて得られた貴重な教訓の上に成り立っていることを実感する。あわせて、我々が旭川で派遣準備を始めた当初から、現地における活動の終始を通じ、教訓収集チームの専門家が常に我々とともに現場に在ってリアルタイムで状況を把握するとともに、研究本部が総力を挙げて、我々の行っていることの全てを客観的な目で記録・分析して頂いたことに感謝したい。8000キロ離れたサマーワでの活動の実態と教訓が、直ちに全国の部隊等まで共有され、今後の任務に反映されるシステムを作って頂けたこと、そして、今回こうして「行動史」が刊行されることは、陸上自衛隊にとって極めて大きな意義があると思う。イラク派遣に携わった者の一人として心から御礼申し上げますとともに、本「行動史」が、陸上自衛隊の今後の任務遂行という、新たな航海にとっての灯台となることを願ってやまない。